

## 演劇落語×月亭遊方落語

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

2023年10月16日(月)、当センター主催にて古典落語を題材にした二人芝居と落語を聴く「演劇落語×月亭遊方落語」を開催した。会場は茨木市の男女共生センターローズ WAM (ワムホール) である。学外に開かれたイベントであるため、本学の学生や教職員に限らず多数の方にご参集頂いた。上方文化を代表する芸能「落語」と、落語にまつわる舞台作品を上演することで、学生や市民の皆様へ文化芸能に触れる機会を提供することが本イベントの目的である。この日、総じて百名を超える観客がその芸能に魅了された。

言うまでもなく落語は日本を代表する大衆芸能の一つである。演者が(通常は)一人で座布団に座り、身振りと話だけでいろいろな役柄を演じ分けるのだ。単なる滑稽話にとどまらず人情に訴える演目もあり、大変に間口の広い話芸である。対して演劇落語とは、古典落語の素材をリスペクトしながら二人芝居で魅せる現代演劇シリーズを指す。<sup>1</sup> 観客への語りや役柄同士の会話で構成される落語を立体化(二人の俳優が全身を使って表現)することで、観客の想像力をさらに掻き立てる表現である。

実演を披露したのは、落語家の月亭遊方(つきていゆうほう)氏、アトリエ・センターフォワード代表で演出家・劇作家・俳優の矢内文章氏、関西屈指の実力派俳優である坂口修一氏の三名である。上演後には元・雑誌「上方芸能」編集長であるセンター長の広瀬依子氏、筆者を交えてアフタートークを実施した(アフタートークについては別稿をご覧頂きたい)。

開演時間を迎えると、まずは月亭遊方氏の落語『寄合酒(よりあいざけ)』から始まった。町内の若い衆が金がないので肴をめいめい持ち寄り飲もうとするが、料理が不慣れな男ばかりが集まったため大混乱。がさつで喧しくて、とてもにぎやかなお喋りである。徐々に客席の笑い声のボルテージも上がり、サゲの後には客席から大きな拍手が上がった。

『寄合酒』は代々の桂春団治の十八番(オハコ)として知られた古典落語である。落語好きの方はよくご存じの演目かもしれないが、しかし客席の約半数を占める学生達の多くは生で落語を観るのが初めてであった。

そんな学生たちからの感想を下記に抜粋して紹介する。

◎落語を初めて生で観ました。話術や演技力がすごく、とても惹きつけられました。見る前は正直そんなに楽しみじゃなかったけれど、終わってみればすごく面白かったです。また機会があれば見てみたいなと思いました(社会学部一年生)

---

<sup>1</sup> “演劇落語×月亭遊方落語”. 表現者工房 HP (参照 2024-1-21). <https://iksalon-hyogensha.com/lp/engekirakugo20230527/>

◎言葉が昔のものもあって少し難しかったけど、現代の用語も混ぜられて面白かったです。イメージでは扇子をもっと使うと思っていました。一回も眠くなることなく話も分かりやすく、おもしろかったのでまた見てみたいです。ありがとうございました。(社会学部一年生)

◎場面の切り替えや、視線の動きで状況が分かって面白かったです。(経営学部経営学科一年生)

◎初めて落語を見たのですがとても面白かったです。古典的な芸能というイメージで難しそうだったり、とっつきにくいという勝手な印象を抱いていたのですが、全くそんなことなくすごく楽しめました。同じ言葉や動きを繰り返すというのが(落語にも演劇落語にも)どちらの演目でもあって、現代のお笑いしか知らない私でも、どこか知っているような気分になって客として空間に馴染むことができました。(心理学部三年生)

◎月亭遊方さんの落語は、私が未成年ということもあり共感はできませんでしたが、大人になったらこんな感じかもなあと思像はできました。面白かったです。(社会学部一年生)

◎一人で何役も演じられているのに、違う役にしか見えないのが不思議でした。演じ分けに本当に感心しました。テンポ感がよく、大変おもしろかったです。(社会学部二年生)

◎落語をする方は表情や仕草があんなにも変わるのかと驚きました。(社会学部三年生)

◎月亭遊方さんの演目では、連続で違う話をやられていて、あきないし、一つ一つオチ以外でもおもしろかったです。(社会学部一年生)

◎お客さんに向かって話しかけるのが印象的でした。話の切り替え時に、机を「バン！」と叩くので、聞きやすいです。また落語を見たいと思いました。(社会学部一年生)

◎初めは落語特有のリズムがわからず、とまどっていましたが、途中からは慣れてきて、気付いた時には話の中に引き込まれていました。(社会学部三年生)

◎落語は演劇落語と違って、一人でお話をすすめる形でしたが、まるで自分がその場にいるような世界観に入ることができて楽しかったです。そこにいない人物のわさびおろしを手にとる姿が見えました。(社会学部一年生)

◎落語で、複数人が喋っているのに簡単に情景が想像できて面白かったです。(社会学部一年生)

◎「落語」は中学生の時に、一度学校の方で見させて頂いて(その時は「時そば」を観ました)、いわゆる、現代のお笑いとはまた違った笑いがあると気付きました。そして、時を経てもう一度見た今回は、その時とはまた違った笑いのポイントがあったなと感じました。(社会学部二年生)

◎落語を久しぶりにみることで、やはり日本の芸能は面白いし、未来に残すべき文化であると感じた。(心理学部三年生)

◎落語の技、上手下手の話し方に感動した。(社会学部三年生)

◎イメージしていたものよりも、落語は迫力のあるものだと思います。落語はその日に何を話すかということを決めるという話を聞いて、驚きました。その日に決めた話であるのに、見ている人の興味を惹きつけたり、笑わせていたりすごいなと思いました。(社会学部一年生)

続いて、二人の俳優による演劇落語『抜け雀(ぬけすずめ)』が始まった。あらすじを、最初に演劇落語をプロデュースした表現者工房のHPより引用する。

〈演劇落語『抜け雀(ぬけすずめ)』あらすじ〉

小田原の宿屋「相模屋」は気のいい夫婦が営む小さな宿だが、大きな宿に客を取られて人気がない。焦るほど妙な客を泊めてしまい、主(あるじ)は妻に怒られっぱなし。今夜も粗末な身なりの男を泊めてしまい…。金は

無くても約束は守るのだ！誠実さが結実する奇跡の物語。<sup>2</sup>

サゲが異なるが、基本的には落語の演目と同様のストーリーである（サゲが気になる方は落語と演劇落語の『抜け雀』を見比べて頂きたい）。

落語で温められた舞台に俳優たちが颯爽と登場する。落語の枕のような世間話を交わしていると不意に物語へと突入するのである。人気がない宿屋の主人を演じる坂口氏に対して、絵描きや女房や雀など沢山の登場人物（や動物たち）を矢内氏が次々に演じていく。二人の熱演に客席はいつしか巻き込まれ、大笑いし、親子の情愛が垣間見える感動のラストへと導かれる。客席は大きな拍手に包まれた。

演劇落語について、次のような感想が学生から寄せられた。

◎とても新鮮で面白かったです。二人しかいないし、舞台セットも衣裳も無いのに世界観、人物像が伝わってきて表現がすごいと思いました。また観たいです。二人でどうやって演じるんだろうと思っていたけど、二人だからこその面白さもあるなと思いました。（文学部人文学科一年生）

◎本当に二人しかいないのかというほどの重厚な設定で、見ていて飽きなかったです。（社会学部二年生）

◎落語と演劇の組み合わせは考えたこともなかったが、落語の良さと演劇の良さが伝わってとても面白く感じた。落語と演劇は異なる点もあるけれど、互いの良さが組み合わさった時、“笑い”になるのだと感じた。（社会学部二年生）

◎観客を巻き込んだ空間でとてもおもしろかった。<sup>3</sup>三人とも取り憑かれたようでひきこまれました。<sup>4</sup>（経済学部三年生）

◎言葉遊びがすごく多くて、びっくりしました。「止まり木」に二つの意味があり感動しました。日にちの転換の時に回るのが印象的。屏風の後ろまで使うのがすごいと思いました。一人が動きまくり、一人が解説する体制も印象的でした。（社会学部一年生）

◎演劇落語を見て、落語は親しみやすいものだと思います。小道具も使わずに、二人の役者さんの演劇だけで物語を理解することができました。（社会学部一年生）

◎セットがシンプルで、二人の役者のみなのにコロコロ変化があり、楽しめた。演劇落語という新鮮なジャンルで、勉強になった。（心理学部三年生）

◎高い頻度で笑わせてくれるシーンがあり、全く飽きずに見つづけることができた。（心理学部三年生）

◎シンプルな舞台装置でも場所と人が分かる。演技と演出がすごい。（社会学部四年生）

◎矢内さんがいろいろな役に回っていましたが、奥さんを演じている時は奥さんにしか見えず、一文無しを演じている時は一文無しにしか見えず、二人しか舞台にいないのに何人もいるように見えました。すずめがお客さんの所まで飛んでいくシーンが面白かったです。お話と場面がどんどん進んでいって、注目すべき所がとても分かりやすく、小さい子でも大人でも世界観を楽しめる場だなと感じました。（社会学部一年生）

◎演劇落語は今回初めて知ったが、照明も途中で変わって思ったより演劇でびっくりした。（社会学部一年生）

◎勢いがすごかったです、、落語と演劇、違うようで似ていて、似ているようで違うけど、何が違うのかがはっきり

2 前掲“演劇落語×月亭遊方落語”

3 上演中に俳優が客席に降りて観客とやり取りをする演出があった。

4 『寄合酒』を披露した月亭遊方氏も城主役として『抜け雀』にゲスト出演しており、このような仕掛けもイベント的に客席が盛り上がる一要素であった。

しない感じです。落語も演劇落語も、その世界の情景がはっきりと想像できました。(社会学部二年生)

◎落語だと想像するのが難しい昔の様子分かりやすく、楽しかった。(文学部人文学科一年生)

◎初めて落語を見て、想像していたよりもフランクで面白かった。演劇だと、初心者の方は理解しやすかった。(社会学部二年生)

◎座っての落語とは違った大きな動きの演劇落語は休み所がなく、演者さんは大変そうだなと思いました。(笑) その大変さも楽しそうにみえたのでおもしろかったです。お客さんの笑い声や雰囲気込みの舞台だったなと感じました。客席も一緒に世界に入り込めてとてもよい時間を過ごせました。ありがとうございました!! (心理学部二年生)

終演後のアフタートークでは、作品に関する感想をシェアした後、落語家が映像作品(映画/テレビ等)に出演する際には演技に困る人が多いといったエピソードから、「落語」と演劇における演じ方の違いなど実演家だからこそ話せる興味深い話を伺うことができた。冒頭にも記したが、アフタートークの内容については別稿をご覧頂きたい。

落語に限らず演劇も「生」で鑑賞したことのない学生は多い。本来、成り立ちの全く異なる二つの文化芸能を同時に鑑賞することのできた本企画は、学生たちにとって得難い学びの機会になったのではないだろうか。

上方文化笑学センターでは、今後もこのような機会を作るべく、来年度も企画を考えているところである。

#### 〈参考文献〉

『上方落語家名鑑ぶらす上方噺』(著・やまだりよこ、出版文化社、2006)

“演劇落語×月亭遊方落語”. 表現者工房 HP (参照 2024-1-21). <https://iksalon-hyogensha.com/lp/engekirakugo20230527/>